

I サムエル 21 章「主は救い出してください」

幸いを経験する時に賛美することは容易でしょう。喜びと感謝から自然に賛美が湧き起こってくるでしょう。では、苦難に遭った時はどうでしょうか。状況を見ていたら賛美することは難しいかもしれません。しかし、主を見つめるなら、変えられていきます。ダビデの歩みと彼が歌った詩篇から教えられたいと思います。

1. ノブの祭司アヒメレクのところで (:1~9)

ヨナタンと別れた後、ダビデは一人で逃げていきます。まず彼が行ったのはノブという町です。当時、その町には聖所が置かれていたようです。そこで祭司たちが仕えていました。

祭司アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて、「なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか」と問います。何か問題があるに違いないと察したのでしょう。

一方ダビデも、アヒメレクがサウルに近いアヒヤの兄弟なので、信用できるか分からないと思ったのでしょう。自分が一人で来たことについて作り話をします。2 節。サウルの命令によって自分は行動しているとダビデは嘘をつきました。ダビデは普段は正直な人として行動していましたが、彼のこのような行動も聖書は記録しています。いのちを狙われて、一人で逃げなければならないダビデの心細さが表れたのでしょう。

しかし、ダビデがこのように嘘をついたことは問題でした。後で悲劇につながってしまいます。自分を守るために、真実を語らないことが、些細なことと思っても後に大きな問題になってしまうことがあります。

ダビデは祭司にパンを求めます。祭司は答えます。4 節。「聖別されたパン」とは、聖所で机の上に二列に並べる 12 個のパンのことで、「臨在のパン」とも呼ばれます。安息日ごとに新しいパンに換えることになっていました。ちょうど新しいパンに換えて、取り下げられたパンがありました。

しかし、そのパンは祭司だけが聖所で食べると律法で定められていました。それでも、アヒメレクは「もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら」、そのパンを与えることができますと言います。アヒメレクは律法の定めを曲げています。しかし、彼はダビデの肉体的な必要を優先させています。それは決して間違いではありませんでした。というのは、このことを主イエス様が例としてあげて正しいこととして教えたからです。(

ルカ 6 章 1~5 節。定めを形式的に守ることよりも、神を愛し、隣人を愛する真実の愛を主は求めておられます。アヒメレクは定め通りにするよりも、ダビデをあわれみ、彼の必要に応えようとしたのです。こうしてダビデは当面の食糧を得ることができましたが、後味の悪さが残ります。

聖書ではその後に挿入するように一つのことが記されています。7 節。ちょうどその時その所に、サウルのしもべの一人がいました。ドエグという名のエドム人です。この人がそこにいたことが次の章に記されている悲劇につながります。ただ、そのことも主の支配の中にあったことと思います。その人が「主の前に引き止められていた」とあるからです。聖所における何かの儀式のためにそこに留まっていたということなのかもしれません。その背後には主の導きや支配があったということでしょう。

ダビデはパンだけでなく、武器を求めました。ダビデは急いで逃げて来たために武器を持っていませんでした。身を守るための武器を求めました。「王の命令があまりにも急だったので」とは、よく考えてみると先に話したことと矛盾しているように思います。

しかし、祭司はその点に触れずに答えます。9 節。祭司アヒメレクも矛盾に気づかなかったのか、あるいは、ダビデの様子に何か事情があるのだろうと察して、あわれみを持って対応したのかもしれません。

その聖所には、ダビデがかつて討ち取ったペリシテ人ゴリヤテの剣が置いてありました。どうしてそこに置いてあったのかは分かりません。このことにも主の導きと備えがあったのでしょう。

ダビデは喜んで受け取りました。そして、急いでその場を離れました。サウルのしもべのドエグがそこにいたことに懸念を持ちましたが、何もできずに急いで離れることしかできなかったでしょう。

このノブにおける祭司とのやりとりを通して、ダビデの不正直な態度と切羽詰まって心が弱っている様子を知ることができます。それとともに、そんなダビデに対する主のあわれみも感じるすることができます。

2. ガテの王アキシユのところ（：10～15）

さて、ノブを離れたダビデはどこへ行ったのでしょうか。10節。なんとダビデはペリシテ人の町ガテに逃げて来ました。どうしてでしょう。想像できるのは、サウルから逃れるにはイスラエルの領内から外に出たほうが良いと思ったということでしょう。また、ガテはダビデの出身のユダ部族の相続地から西に出た近くにある町です。そして、サウル王からいのちを狙われている自分は、共通の敵を抱えていることで受け入れてもらえるかもしれないという期待があったのかもしれませんが。

しかし結果から言うと、この時のダビデの行動は失敗に終わります。ガテの王アキシユの家来たちはダビデのことを知っていました。自分たちの勇士ゴリヤテを倒した敵のことはよく覚えていたでしょう。しかも、イスラエルの中で人々が「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」と歌っていたことも知っていました。そして、彼らは「かの地の王ダビデではありませんか」と言っています。サウルに優るような存在なのに、一人で来ているということから、ダビデが何かの理由で逃げて来たことを見抜き、ダビデをあざけり、皮肉をこめてそう言ったのでしょう。

ダビデはアキシユの家来たちのことばを気にして、恐れます。敵の勇士が飛び込んで来たことを格好の機会として、王アキシユは自分を殺すのではないかと非常に恐れました。

そのときにダビデがとった行動に驚きます。なんと気が変になったふりをしました。「門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを垂らしたり」して狂人であるように演じました。狂人と見られるなら、殺されずに、解放されるだろうと思ったのです。

ダビデの演技は迫真のものだったのでしょう。アキシユは相手にしようとせず、ダビデはそのまま解放されたようです。

それにしても、狂人を演じていたダビデはどのような思いだったのでしょうか。それによって難を逃れることができた後もどのような思いだったのでしょうか。このときダビデが歌った詩篇34篇から分かります。

1節。いのちを狙われ、敵の王のもとに逃れ、惨めな状況を経験したダビデですが、そのような中でも主をほめたたえています。

4節。頭がおかしくなったかのようにふるまった時にも、ダビデは主を求めていたことが分かります。そして、主は答えて、救い出してくださいました。そのことを証ししています。

それゆえに、自分だけでなく主の聖徒たちが主の恵みを知ることができるようにと励まします。8～10節。

その主の恵みを受け取るために大切なのは主を恐れることです。11節。ダビデはアキシユの家来たちのことばによって恐れてしまいました。また、13節で「唇に欺きを語らせるな」と言っていますが、ダビデはノブでもガテでも欺きを語り、演じました。そのことを悔い改めたのでしょう。17～18節。悔い改めた者を主は救い出してくださいます。

19節。罪の満ちているこの世では、理不尽と思えること、他の人の罪によって苦しむことが多く起こります。しかし、そのすべてから救い出してくださいます主がおられます。その主を恐れ、主を求める人は、主の救いを経験することができます。その「口にはいつも主への賛美がある」のです。

21章には、サウル王からいのちを狙われ、一人で逃げて行かなければならなかったダビデの孤独な歩みが記されています。ノブの祭司アヒメレクのところでも、ガテの王アキシユのところでも、ダビデは偽りを語り、演じてしまいました。それほど切羽詰まり、恐れていました。

しかし、ダビデに油を注ぎ、霊を注いでくださった主は、目には見えませんが、ダビデと共にいてくださいました。出来事の背後におられ、導いてくださいました。ダビデは弱さゆえに偽りを重ねましたが、悔い改めて、主を恐れ、主を求めました。そのダビデに確かに主は答え、彼を救い出してくださいました。

私たちも理不尽な苦しみを経験することもあり、罪のゆえに苦しむこともあります。しかし、悔い改めて、主に身を避けるなら、主は確かにすべてから救い出してくださいます。その主のことを思い巡らし、主を賛美しましょう。